

令和5年度 初等中等教職員国際交流事業 実施報告書

2023-2024 International Exchange Programme for
Primary and Secondary School Teachers Programme Report



はじめに



Introduction

目次

Contents

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCUはアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、2001年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。本事業は、ユネスコや国際連合大学（UNU）の事業として実施され、2018年度からは文部科学省の事業として引き継がれ、20年以上途切れることなく続いています。本事業における日本のパートナー国は、2001年から韓国、2002年から中国、2015年からタイ、2016年からはインドが加わり、現在4ヶ国と連携し、東アジアから東南アジア、南アジアに交流国を広げています。開始当初より2024年現在までに、海外教職員は4ヶ国あわせて4,400人以上、日本教職員は1,200人以上が教育現場を舞台に相互理解と友好の増進に貢献してまいりました。

2019年度後半以降、新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から、オンラインを中心に実施をして参りました。2022年度は韓国教職員招へいプログラムを対面とオンライン形式で開催し、2023年度は約4年ぶりに4ヶ国の海外教職員招へいプログラムにおいて対面交流を再開しました。久しぶりの対面では、感染症拡大前の状況とは様々な様相が変化した中で国内外の関係機関との緊密な連携を取り、事業企画・運営を進めました。各プログラム期間中は、教育機関・文化施設の訪問、教職員・児童生徒との交流、ホームビジットなどの多様な活動を織り交ぜ、「学校と地域の連携」などといったプログラム毎の特色あるテーマを掲げ、海外と日本の先生が対話を通して交流を深めることに力をいれました。加えて、過去3年間に培ったオンラインでの交流の手法も組み合わせながらより充実した新しい形でのプログラムを模索する1年になりました。

2023年度は特に顔と顔を合わせて、その場の空気を感じながら、五感を使って交流をすることの重要性に、海外への渡航が叶わなかったこの過去3年間を経て、改めて気付くことができました。今後も様々な社会の変化が生じることが予想される状況においてACCUはより魅力的な国際交流の機会を創り出していくため、今後も各国のカウンターパートや国内外の多様な「教職員」と協働してまいります。

最後に、本事業の実施にあたり多大なるご支援とご協力をいただきました関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

2024年3月

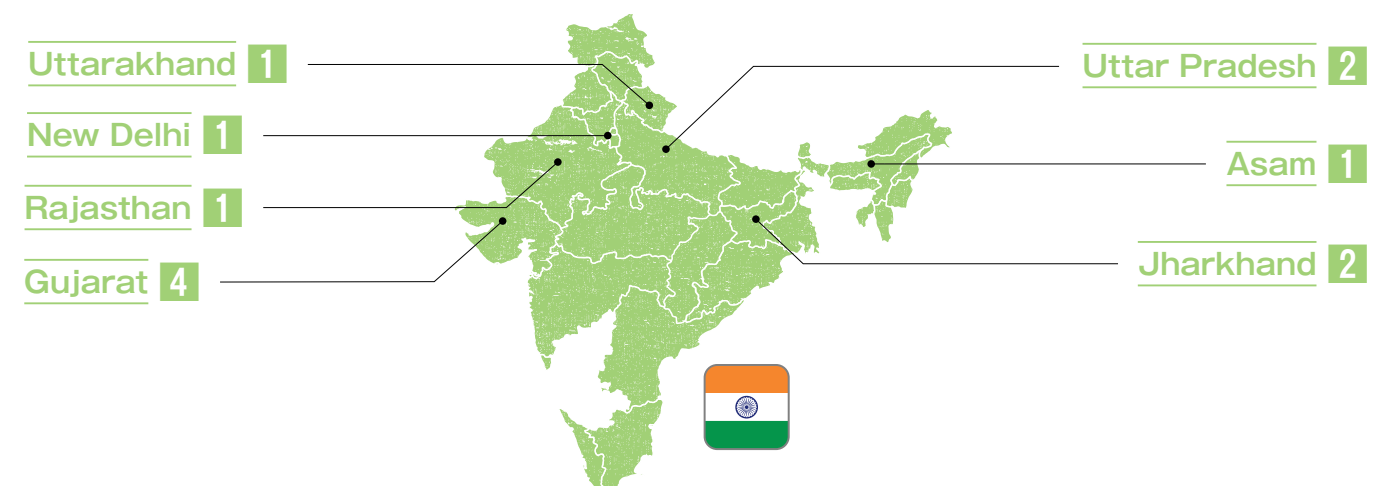
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

<u>1</u>	はじめに
<u>3</u>	令和5年度の参加者の多様性（地域と校種） 事業概要、実績
<u>6</u>	第1章 韓国との交流
<u>7</u>	1. 韓国政府日本教職員招へいプログラム（ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラム）
<u>10</u>	2. 韓国教職員招へいプログラム
<u>14</u>	第2章 中国との交流
<u>15</u>	1. 中国教職員招へいプログラム（中国とのオンライン交流）
<u>18</u>	第3章 タイとの交流
<u>19</u>	1. タイ政府日本教職員招へいプログラム（タイ派遣プログラム）
<u>22</u>	2. タイ教職員招へいプログラム
<u>26</u>	第4章 インドとの交流
<u>27</u>	1. インド教職員招へいプログラム
<u>30</u>	事業総括 今年度の事業を振り返って
<u>31</u>	付録
<u>33</u>	令和5年度プログラム協力機関・協力者 プログラム関連機関 事業実施運営機関

ACCUは「地方にいても、地方からでも」国際交流の機会を享受できること、参加者の属性を限定しすぎないことを大切にしています。今年度は派遣プログラムに参加した日本教職員は33名、招へいプログラムに参加した海外教職員は77名、招へいプログラムの交流に参加した日本教職員は30名でした。このページでは令和5年度において4つの交流国(韓国、中国、タイ、インド)および日本の様々な地域や校種から本プログラムに参加した先生の多様な分布を地図やグラフで示しています。

地域別参加人数一覧 ※複数のプログラムに参加した日本教職員あり

地域	参加人数
北海道	1
宮城	3
新潟	3
群馬	1
茨城	4
千葉	7
東京	1
神奈川	2
静岡	1
愛知	7
岐阜	1
長野	1
滋賀	1
大阪	3
兵庫	5
岡山	1
福岡	1
大分	1
宮崎	2
沖縄	1



事業概要

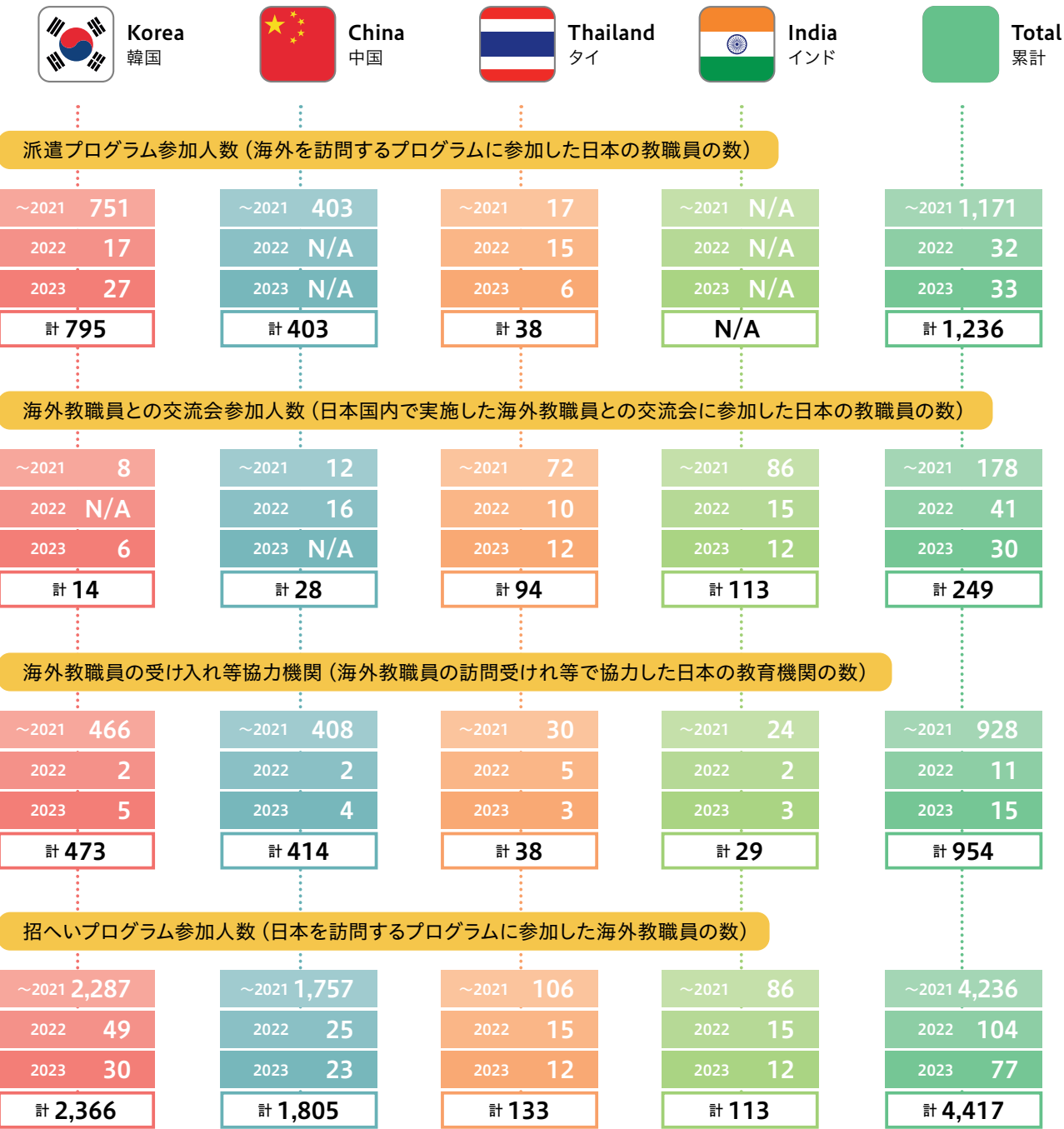
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCUは2001年より、未来を担う子ども達に対する発信力や影響力を持つ教職員を対象とした国際交流事業を実施しています。令和5年度は文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム」の一環として「初等中等教職員国際交

流事業」を実施しました。

本事業では、教職員の国際的な対話を通じた学びの場づくりを軸に、教育現場での国際交流活動の活性化および国際理解推進を目的としています。プログラムにおける教職員同士の交流を通して、お互いの国の教育制度、教育事情および文化について相互理解を深め、教職員自身が変容していく端緒を開き、ひいては多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指しています。

事業実績



第1章
韓国との
交流

Korea





韓国政府日本教職員招へいプログラム

(日韓教職員対話プログラム)

背景

日本と韓国との国際交流事業に関しては、文部科学省の協力のもとで、韓国から教職員を招へいする「韓国教職員招へいプログラム」を2001年より実施し、日本教職員を韓国に派遣するプログラムを2003年より文部科学省および国際連合大学の協力のもとで実施してきました。これらの一連の事業は韓国政府に高く評価され、2005年からは韓国教育部の協力のもと韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)により「ユネスコ日韓教職員対話プログラム」の一環として「韓国政府日本教職員招へいプログラム」が実施されています。これらの事業により、これまでに合わせて3千人以上の日韓の教職員が海を渡り、新型コロナウイルス感染症拡大以降も、オンライン上での交流を継続してきました。今年度は4年ぶりの現地での対面形式の交流とオンライン形式の事前事後のセッションを組み合わせたハイブリッド型のプログラムを実施しました。

今年度のプログラムは韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)の招へいにより、文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業」の一環で実施されました。

目的

- 1) 韓国のユネスコスクールを含む学校およびコミュニティにおける持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)および地球市民教育(GCED: Global Citizenship Education)の分野における効果的な実践を探究すること
- 2) 日韓の教職員間のネットワーク構築を強化すること
- 3) 東アジア地域における平和の文化の実現に貢献すること

活動内容

- 1) 現在の韓国の教育政策や課題についての講義受講
- 2) 韓国教職員との交流
- 3) ユネスコスクール訪問(授業見学・持続可能なコミュニティ作りのためのESDやGCEDの活用方法の視察等)
- 4) 文化遺産や一般家庭の訪問を通じた韓国文化の特色に対する理解増進

日程

日付	訪問先(形式)	活動
7月8日(土)	オンライン	・オリエンテーション ・文部科学省による韓国の教育制度等に関する講義 ・事前ワークショップ
日本		
7月15日(土)	羽田空港近辺	出発前オリエンテーション
日本	羽田、ソウル	・ソウル到着 ・現地オリエンテーション ・講義
7月16日(日)		
韓国滞在第1日目	ソウル	・開会セレモニー ・韓国教職員との交流 ・ユネスコ世界遺産への訪問 ・歓迎晩餐会
7月17日(月)		
韓国滞在第2日目	ソウル	・学校訪問その1 ・プログラム振り返りセッション ・ホームビジット(一般家庭訪問)
7月18日(火)		
韓国滞在第3日目	京畿道(坡州市など)	・学校訪問その2 ・フィールド訪問
7月19日(水)		
韓国滞在第4日目	京畿道(漣川郡など)	・生物圏保護地域／ユネスコ世界ジオパーク訪問 ・報告会 ・閉会式・送別晩餐会
7月20日(木)		
韓国滞在第5日目	ソウル、羽田／関西国際	帰国(羽田空港／関西国際空港)
7月21日(金)		
韓国滞在第6日目	オンライン	プログラム内容の振り返り
8月26日(土)		
日本	オンライン	プログラム後の実践についてのフォローアップ
2024年1月27日(土)		
日本		

参加者数

下記の教職員・随行員を併せた30名

- (1) 公募により選抜された教職員もしくは教育行政職員
- (2) 日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、およびACCUの職員

参加資格

1. 日本の初等中学校または特別支援学校の教職員もしくは教育行政職員であること
2. 国際交流・国際理解教育・ESD・GCED等の活動に携わっている、または高い関心を持っていること
3. 自らの教育経験を共有する韓国の教職員と積極的に交流をする強い意志があること
4. プログラムに対しての目的意識を事前に強く持った上で帰国後にプログラムの経験を活かして国際交流・国際理解教育・ESD・GCED等の推進に寄与できる者。
5. 全てのプログラム活動に参加できる健康状態であること
6. 過去に本プログラム(対面形式での韓国政府日本教職員招へいプログラム)への参加が無いこと
7. 日本国籍であること

通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の通訳を配置する。

参加者リスト

	氏名	所属先	校種/担当教科
1	岩田 智文	愛知県江南市立古知野南小学校	理科
2	郡 守彦	神戸市立義務教育学校八多学園	理科
3	米山 知里	埼玉県立浦和第一女子高等学校	国語
4	加茂 篤思	登米市立加賀野小学校	理科
5	河野 大樹	大分県立大分上野丘高等学校	世界史
6	嶋田 拓哉	千葉県立松戸国際高等学校	英語
7	夏子 史和	野洲市立中主小学校	小学校
8	根岸 一成	宮城県加美農業高等学校	国語
9	藤井 美香	上越市立東本町小学校(上越教育大学教職大学院)	小学校
10	小川 亮	北九州市立門司中学校	社会科
11	津曲 康夫	宮崎県門川町立草川小学校	外国語
12	都倉 さゆり	神戸市立湊小学校	小学校
13	津嶋 大樹	宮城県立延岡高等学校	英語
14	岡田 つぐみ	千葉県立東葛飾中学校	英語
15	坂井 琢雄	新潟市立内野中学校	社会
16	仁木 淳浩	豊田市立美里中学校	社会
17	行場 二千佳	登米市立佐沼小学校	全教科
18	富山 正美	茨城県立並木中等教育学校	英語
19	平澤 香織	横浜市立東高等学校	社会
20	橋本 真里	愛西市立立田北部小学校	国語・算数
21	皿海 優子	神戸市立竜が台中学校	英語
22	大野 綾華	八千代市立高津中学校	養護
23	山本 希鈴	認定NPO法人コクレオの森箕面こどもの森学園	小学校

	氏名	所属先	校種/担当教科
24	高崎 智里	兵庫県立宝塚西高校	保健体育
25	片桐 庸至	八千代市教育委員会	社会科
26	前田 良隆	大阪府教育庁	英語
27	勝馬 あずさ	沖縄県立大平特別支援学校	英語
28	野内 瑛里	文部科学省大臣官房国際課	—
29	伊藤 妙恵	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	—
30	杉戸 卓磨	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	—

実施内容

約4年ぶりに対面形式での実施となった今年度の本プログラムは、日本全国から27名の初等中等教職員・教育行政職員が参加しました。初日のオリエンテーション、2日目の開会式・地球市民教育についてのワークショップの後、夜には歓迎晩餐会で盛大な歓迎を受けるとともに、両国の参加者が互いの国の伝統的な曲を歌い、会場は温かい空気に包まれました。3日目にはソウル市内の小学校を訪問し、児童に対して日本教職員が日本の伝統的な遊びを伝える授業を行い、韓国教職員との議論を通じて交流を深めました。その後、ホームビジットとして韓国の一般家庭を訪ね、韓国の日常と文化・慣習を知る機会となりました。4日目の午前中は非武装地帯(DMZ)において貴重な生態系を観察し、午後は京畿道の高校で生徒・教職員との交流を深めました。実質最終日となる5日目には、ユネスコジオパーク訪問後に再びDMZに赴き、平和について考えを深めました。夕方に行われた報告会では、日本教職員が5日間のプログラムを通じた気づきや学びを発表し、韓国の関係者への感謝の気持ちを述べました。

現地でのプログラムが終了した後にはフォローアップのためのミーティングがオンライン形式で令和5(2023)年8月26日と令和6(2024)年1月27日に計2回行われました。このフォローアップミーティングは韓国でのプログラムでの経験を参加者が最大限有効活用して、その効果が持続可能なものとなることを狙いとしました。ミーティングにおいてはプログラムを経ての自身の変容についてや現地での経験をどのようにそれぞれの現場での教育実践に活かしたかなどを参加者同士で話し合う機会を設けました。またこの機会を通じて参加者同士のネットワークをより強固なものとする事で更なる協働の可能性を広げることをできました。

久しぶりの対面形式での実施となった今年度のプログラム参加者は、改めて、実際に顔を合わせて交流することや五感を使って経験することの重要性を感じました。なお、過去3年間のオンラインを中心としたプログラムでの経験も活かし、本プログラムは対面形式の交流の前後にオンライン形式のセッションがあり、それぞれの良い部分を盛り込ん

だ新しい交流方法を取り入れました。今後は、対面形式でのプログラムから得た気づきや学びを一過性のものにせず、参加者の学校・地域に対して長期的にインパクトをもたらすことが期待されます。

参加者の声

- 本プログラムに参加して、人と人との繋がりを強くするために国際交流は重要な役割を担っていると強く実感しました。本やインターネットで見るだけでなく、実際にその国に行ってみないと分からない魅力や特徴、現地の人と関わってみないと分からない考え方の違いや雰囲気がやはりあるなど学びました。
- 今回のプログラムを通して、学校で働くだけでは絶対に出会えなかった価値観や経験をもった先生方にたくさん出会うことができた。国はもちろん、自治体や校種が違う方々と交流することは、今いる自分の職場や当たり前にしてきた価値観を見つめ直すきっかけになった。
- 本プログラムに参加したことで、時には自分のコンフォートゾーンから一歩踏み出すことの大切さに気付くことが出来た。この気付きを教職員だけでなく生徒にも体感してもらいたいという思いが生まれたため、少しずつ出来る範囲で他校との交流学习を実施したいと思っている。



안녕하세요

韓国教職員招へいプログラム

背景

23回目を迎える今回のプログラムでは、「私たちの生活を豊かにするために必要な教育を考える一学校内外における教育活動の可能性とこれから」をテーマに、オンラインと対面形式を組み合わせ、韓国教職員30名を招へいしました。コロナ禍を経て、あらためて海外とつながる意義、自らのコンフォートゾーンを飛び出し、他者との出会いを通じて、日本と韓国の相互理解や友好促進をねらい、教育現場における国際交流や国際理解を展開していきました。

目的

日韓教職員が互いの教育制度、教育事情および文化について相互理解を深めるとともに、多様性への理解と尊重を育むこと。そして、プログラムで得た学びや気づきを参加者が自身の教育活動を通して次世代に伝えることで、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現につなげることを目指しました。

活動内容

オンラインや対面形式により以下の活動を行いました。

- (1)日本の教育制度についての講義受講
- (2)学校訪問(教職員および児童生徒との交流など)
- (3)日本の教職員との意見交換や対話交流
- (4)フォローアップミーティング

日程

日付/日程 (2024年)	交流形式・ 訪問先	内容	
		宮城プログラム	福島プログラム
1月5日(金)	オンライン	・「日本の初等中等教育の概要」および「日本のコミュニティ・スクール」に関する講義受講 -文部科学省 初等中等教育局 初等中等教育企画課 国際企画調整室 係員 柿澤 聖奈 氏 -文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課 地域学校協働推進室 地域学校協働企画係 主任 小池 紗江 氏 ・ACCUによるオリエンテーション①	
1月14日(日) 第1日		日本到着、ACCUによるオリエンテーション②、歓迎交流会	
1月15日(月) 第2日	宮城県	・宮城教育大学教育学部 国際教育領域 教授 市瀬 智紀 氏による講義 「日本の東北地域における学校と地域の連携」 ・名取市震災復興伝承館訪問 ・各地へ移動	

日付/日程 (2024年)	交流形式・ 訪問先	内容	
		宮城プログラム	福島プログラム
1月16日(火) 第3日	宮城県 福島県	学校訪問 宮城訪問団歓迎交流会	学校訪問 ホームビジット
1月17日(水) 第4日	宮城県 福島県	沼訪問、学校訪問、 ホームビジット	学校訪問 福島訪問団歓迎交流会
1月18日(木) 第5日	宮城県 福島県	学校訪問 リフレクション(プログラムの振り返り等)	教育委員会訪問
1月19日(金) 第6日	宮城県	日本出発	
1月31日(水) 事後	オンライン	フォローアップミーティング	

参加者数

韓国教職員30名【韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)並びに韓国教育部の職員を含む】

参加資格

- (1)大韓民国の国籍を有すること。
- (2)日本の先生や学校との交流に関心をもつこと。
- (3)プログラムの全日程(オンライン・対面プログラム含む)に意欲と積極性をもって参加できること。
- (4)プログラム参加中ならびに参加後も教育分野における日本との交流および相互理解を深める活動に取り組む情熱と志があること。
- (5)自らの気づきや学びを活かせる教育現場を有すること。
- (6)オンライン交流に必要な機材を用意でき、十分なインターネット環境があり、かつパソコンやアプリケーションの操作ができる者。
- (7)所属する学校等からの推薦を受けた、韓国の初等中等教育に携わる教職員および教育行政職員であること(教育行政官及び教育専門家を含む)。
- (8)健康でプログラムの全日程(オンライン・対面プログラム含む)に参加が可能であること。

評価と報告

- (1)日本滞在プログラム終了後
参加者はACCUの用意する評価表に記入をした。
- (2)帰国後(フォローアップミーティングの後)
参加者はプログラム中および帰国後に行った活動と成果に関する報告書を作成し、提出した。

通訳

ACCUはプログラム期間中、逐次通訳(日－韓)を手配する。

参加者リスト

	氏名	所属先	役職 / 担当科目
1	Han Kyung Koo	Korean National Commission for UNESCO	Secretary-General
2	Choi Eun Hye	Haneulbit Middle School	Social studies
3	Choi Soonju	Wabu High School	English
4	Choi Soon Yang	Yonggang Middle School	Moral ethics
5	Han Jongso	Nonsan Daegeon High School	English
6	Ha Sang Chul	Gyeonggi Automotive Science High School	Automotive
7	Hyeong Jinyeong	Doraetul Middle School	Social studies
8	Jeong Hye Ri	Busan SungWoo School	Special elementary education
9	Kim Beomsik	Kyunghwa Girls' High School	English
10	Kim Chulhwan	Gyeongsangnamdo Office of Education	Head
11	Kim Jeong Hyeon	Gangwon Myeongjin School for the Blind	History, Social studies
12	Kim Jinsook	Gangwon State International Education Institute	Supervisor
13	Kim Minsu	Wonhwa Girl's High School	English
14	Kim Taeun	Yumkwang High School	English
15	Lee Jung Il	ShinSeong High School	Korean
16	Lee Seoyoung	Gimhae Foreign Language High School	Japanese
17	Nam Youjo	Kyungpook National University Elementary School	All subjects except music and P.E.
18	Park Juhee	Jeseok Elementary School	Principal
19	Rue Ju Hee	Sejong City Office of Education	School Supervisor
20	Sim Seoyeon	Dasanhangang Middle School	Social studies
21	Song Hyunjeong	Chirwon High School	Ethics
22	Yoon Eunjin	Incheon Misong Elementary School	All subjects

	氏名	所属先	役職 / 担当科目
23	Kwon Song	Korean National Commission for UNESCO	Senior Programme Specialist
24	An Jinhwan	Incheon Foreign Language High School	English
25	Bae Dongyul	Haengjeong Elementary School	Korean
26	Chung Jinsun	Seoul Global High School	Social studies
27	Lee Kee Kuen	Somyong Girls High School	English
28	Kim Jung Hye	Seoul Shinyongsan Primary School	All subjects
29	Lee Geonhee	Ministry of Education	English
30	Seo Hyunsook	Korean National Commission for UNESCO	Director

実施内容

本年度の韓国教職員招へいプログラムでは、「学校と地域の連携」をテーマに、オンラインと対面形式によるプログラムを企画しました。テーマ設定の背景には、日本と韓国において少子化、都市化、グローバル化が進行している中で懸念されている教育に関する様々な課題に対し、地域と学校がどのようにパートナーとして連携・協働していくべきかを考えるきっかけをつくらうとしたことがあります。この度は韓国各地で活躍されている教職員及び教育行政職員30名がプログラムに参加し、対面プログラムでは宮城県・福島県

の教育機関や教育文化施設等を訪問しました。対面プログラム初日には韓国教職員歓迎交流会を仙台で行い、受入協力機関の教職員に加え、今年度の韓国政府日本教職員招へいプログラム参加者数名にもご参加いただきました。歓迎交流会では、日韓教職員同士で教育や自身の趣味など多様な話題について話すことができ、また韓国と日本の教職員が日本や韓国の歌を披露する場面もあり、日韓参加者が心で繋がるきっかけとなる場となりました。翌日(1月15日)には、宮城教育大学の市瀬智紀教授に「日本の東北地域における学校と地域の連携」に関する講義をしていただきました。講義では、全国的に推進されている学校と地域の連携・協働の方針やそれらに関連する教育改革、東北地域の教育現場における現状や実践例等をもとに、社会に学校を開くことの必要性について考える機会を提供していただきました。また、宮城教育大学教職大学院に在籍されている現職教員の方も講義に参加され、現場での取り組みの紹介に加え、韓国教職員の質問にお答えいただくなど、理論的・実践的視点から地域連携について学ぶ貴重な時間となりました。講義に参加した後は名取市震災復興伝承館を訪問し、一般社団法人ふらむ名取代表理事の格井直光氏に東日本

大震災発生当時の状況や心情についてお話しいただきました。被災経験の語りを聞く中では、言葉に表すことのできない悲痛な思いを感じるとともに、震災の教訓を自分たちの生活にどのように生かすことができるのかを考えることができました。

1月16日から1月18日にかけて、宮城県では加美農業高等学校、登米市立加賀野小学校、福島県では小野町立小野中学校、小野町立小野小学校、小野町教育委員会を訪問しました。また宮城県グループでは日本雁を保護する会会長の呉地正行氏とみやぎ北ユネスコ協会会長の若見朝子氏を講師にお迎えしての蕪栗沼・伊豆沼訪問、福島県グループでは夏井諏訪神社や小野町ふるさと文化の館の訪問等、学校内外における教育活動や文化、自然環境や農業等幅広い分野に関する知見を広げることができました。各教育機関では、学校の特色や力を入れている取り組み等機関概要紹介に加え、校内・部活動見学や授業参観、韓国教職員が日本の児童・生徒対象に韓国や韓国の文化について紹介する「交流授業」、日本文化体験として飾り巻き寿司調理・もちつき体験、地域学習で生徒が作成した「ふるさとCM」の紹介、日韓教職員の意見交換や対話をメインとする「教職員交流」等、多種多様な活動をしました。各教育機関における教職員交流では、教材・教具の選定方法、家庭・地域との連携、児童・生徒が抱える課題への対応、教職員の労働環境といった日韓教職員が互いに興味をもつ話題について話し合い、また両国共通で教職員が抱える悩みについて考えました。この度の「日韓教職員交流」は日々一生涯懸命教育活動に携わっている教職員を互いに尊敬し、認め合い、励まし合うことのできる重要な機会となりました。

オンライン・対面ともに限られた時間の中での交流となりましたが、プログラムに関わった皆様が現地での直接的な交流により、日韓両国が参加者・関係者にとって身近な存在となっていく様子も見られました。また、学校訪問や日本の一般家庭を訪問する「ホームビジット」で出会った子どもたちがのびのびと育っているその姿に感動し、刺激を受け、



地域全体で子どもの成長をサポートすることの大切さを実感することができました。さらに、本プログラムをきっかけに、日韓教職員がともに学校間交流への意欲を高め、継続的な交流に向けて動き出しています。

参加者の声 (韓国側参加者の声抜粋)

- 韓国と日本が抱えている共通の問題(少子化、高齢化、教師の業務過多、地域との連携など)について話し合い、問題解決のための様々な方法について協議することができ、非常に有益でした。
- プログラムを通して自分自身の変容を感じ、対面交流の価値と大切さを改めて実感しました。自分の所属機関や地域でもこの度のプログラムで体験したような活動(プログラム)を行いたいと思いました。
- 特に印象的だったのは、日本教職員の皆様が私たちを心から歓迎し、歓待してくださったことです。言葉と国境の壁を越えて「生徒を想う心」で繋がることのできる、非常に有意義な経験となりました。
- プログラムのテーマである「地域と学校の連携」について多くの気づきを得ました。私は、子どもたちの日常生活と教室での学びが密接に関連している社会科を教えているため、教科書の内容をどのように生活に結びつけるのが悩みの1つでもありました。地域施設等を学校で活用するだけでなく、生徒自身が地域での活動に取り組み、学ぶことで地元愛と自己肯定感を高めることができた日本の様々な事例を見て「私もこのような教育活動をやってみたい」と思うようなことがたくさんありました。
- 以前日本の学校生活について、所属校で実施したオンライン交流で間接的に知る機会がありましたが、対面交流への参加経験を通して日本の学校における学級経営の方法や、児童・生徒が日常的に参加している活動、さらに給食の流れを現地で直接見ることができ、たくさんの学びを得ることができました。





第2章 中国との 交流

China





中国教職員招へいプログラム

背景

日本と中国との間の国際交流事業としては2002年に中国から初等中等教育教職員を招へいし、プログラムが始まりました。2003年からは中国政府による日本教職員の訪中プログラムに発展し、今日にいたるまで相互交流が続けられ、併せて2千人以上の中日教職員が海を渡りました。コロナ禍以降はオンラインによる交流を行って参りましたが、今年度は対面による交流を再開する形で、文部科学省、中国教育部、苫小牧市教育委員会、各訪問校の協力により、2023年11月26日(日)から12月1日(金)までの6日間に渡り、中華人民共和国から初等中等教育教職員23名を本邦に招へいしました。

今回のプログラムでは「北海道の教育、文化、歴史、環境を学ぶ」をテーマに、様々な形で教育現場のみならず文化施設訪問などを通じて対話・交流の機会を持たせていただき、中日双方の国際理解促進に寄与します。

目的

本プログラムの目的は、プログラム中の活動を通じて、教職員が相手国に対する理解を深めると共にお互いに学び合い、相手国の教職員や生徒との相互理解と友好を促進し、教職員間のネットワークを構築・強化することです。また、プログラム終了後には、教職員が自身の学びを教育現場において児童・生徒・教職員・地域住民等に伝え、国際理解教育、平和教育、ESD(持続可能な開発のための教育)、GCED(地球市民教育)等を含めた「持続可能な社会に向けた教育」を推進する担い手となり、ひいては日中間の相互理解と友好の促進、そして平和で持続可能な世界の実現に繋がることを目指しました。

活動内容

- 学校等の訪問(授業見学、教職員・児童生徒との交流、国際理解教育・平和教育・ESDの視察等)
- 日本の教職員との意見交換
- 文化施設の視察
- 日本の教育制度や関連事項についての講義受講

日程

日付/日程	交流形式・訪問先	活動
11月17日(金)	オンライン	・オリエンテーション ・文部科学省による日本の教育制度に関する講義
事前		
11月26日(日)	北海道	・日本到着
第1日		
11月27日(月)	北海道 苫小牧市	・開会式 ・オリエンテーション ・苫小牧市教育委員会表敬訪問 訪問地教育事情概要説明受講 ・ミール展示館視察
第2日		
11月28日(火)	北海道 苫小牧市	・学校訪問 (授業見学、教員・児童生徒との交流) 苫小牧市立 開成中学校訪問 苫小牧市立 清水小学校訪問
第3日		
11月29日(水)	北海道 苫小牧市	・学校訪問 (授業見学、教員・児童生徒との交流) 苫小牧市立 美園小学校訪問 ・アイヌ民族施設訪問
第4日		
11月30日(木)	北海道 札幌市	・セミナー受講 ・開拓の村訪問 ・報告会、閉会式
第5日		
12月1日(金)	北海道	日本出発
第6日		

参加者数

初等中等教育に携わる教職員23名

参加資格

- (1)中華人民共和国の国籍を有すること。
- (2)所属する学校等からの推薦を受けた、中華人民共和国の初等中等教育の教職員であること(教育行政官及び教育専門家を含む)。
- (3)プログラムを通じて日本の教職員と教育経験に関して積極的に意見交換し活動に携わること。
- (4)プログラム参加後は、教育現場において国際理解および日中交流の推進に取り組むこと。
- (5)健康で、プログラムの全日程に参加が可能であること。

評価と報告

参加者はプログラム終了後にACCUの用意する評価票に記

入し、中国教育部の担当者がとりまとめ、ACCUに提出しました。

通訳

公式プログラム期間中は原則として日本語と中国語(普通話)間の逐次通訳が行われました。

参加者リスト

No.	氏名	所属機関	教科
1	趙宇	中華人民共和国教育部	—
2	陳小冬	三亜市教育局	—
3	宓奇	中国人民大学附属高等学校 三亜校	物理
4	翟鴻武	三亜市田家炳高等学校	生物
5	潘慶	海南華僑中学校国際交流協力室	英語
6	邢翠睿	三亜第一小学校	中国語
7	林藍	三亜第九小学校教職部	科学
8	陳静	海口市長彤中学校党務室	数学
9	孫陽	三亜市天涯区金鷄嶺小学校	数学
10	王華毅	海口市瓊山中学校道德教育部	政治
11	雷栗	三亜市崖州区水南小学校	中国語
12	曾悠	三亜市教育局改革と開発企画課	—
13	肖嵐	中国教育国際交流協会	—
14	張瑜	河北省教育局国際協力交流室	—
15	劉振華	唐山市豊南区胥各莊鎮銀豊中学校	数学
16	趙立芬	唐山遷安市第七実験小学校	中国語
17	丛金慧	承德市承德県第四小学校	道德
18	陳志富	邯鄲市広平県第四中学校	中国語
19	呂愛叶	邯鄲市沙県第二中学校	中国語
20	秦文雅	石家荘市合作街道小学校	中国語
21	張英偉	石家荘市第二中学校事務所	英語
22	廉鉄	秦皇島市青龍滿族自治県第五小学校	—
23	韓曉寒	衡水市桃城区教育局	—

実施内容

本年度のプログラムは「北海道の教育、文化、歴史、環境を学ぶ」をテーマにし、中国よりは河北省、海南省を主とした23名の教職員の方に参加いただき、教育現場のみならず文化施設訪問などを通じて対話・交流の機会を持ち、中日双方の国際理解促進を図りました。

到着日翌日第2日の開会式・オリエンテーションに引き続き、中国と海で繋がる苫小牧漁港を見学いただいた後、苫小牧市教育委員会を訪問、教育長をはじめとした委員会の皆様に加え、苫小牧市公式キャラクター「とまチョップ」よりも暖かな歓迎を受け、「苫小牧市の教育推進の現状と課題」のプログラムの中では、学校1校で解決できない事案等の増大により、Tomakomai-All9という取組を紹介いただき、校

区での課題の共有、関係機関連携の促進 地域全体で子どもを育む「未来の社会をつくるひとづくり」として苫小牧市が一丸となって取り組むことの大切さのお話をいただき、改めて地域連携の重要性を学ばせていただきました。

第3日に清水小学校及び隣接する開成中学校を、第4日には美園小学校訪問を行い、教育現場見学に加え、児童・生徒さんの歌や踊りを拝見するとともに中国側よりの学校・教育紹介及び中国結びなどの伝統文化をご紹介いただくなど、中日双方で学びを深め、対話を重ねる良い機会となりました。

文化施設訪問としましては、ミール博物館、アイヌ民族博物館、開拓の村を訪問し、青少年の航空宇宙・科学技術研修に触れるとともに、我が国の貴重な文化であるアイヌ文化並びに北海道開拓当時の生活を体感し学習するといった貴重な経験をいただきました。また、最終日にはACCUの活動全般に協賛いただいている企業様より、同社の取り組んでいるSDGs活動に関するお話を伺う機会も設けて、北海道の教育のみならず、文化、歴史、環境と様々な知見を得ていただき、中日友好の深耕を図るとともに、今後のより深まりのある交流を期待するものとなりました。

参加者の声

- 今回のプログラムは中日友好と国際理解を深める上で大きな意義があり、実地体験や教育機関訪問を通じて、中日民間交流の友好的基盤を深く感じました。
- 日本の教員と生徒たちの熱意とフレンドリーさを感じました。生徒たちの自律/自立性が印象深くまた、教師がすべての子どもを心から気に掛け、誰一人をも見捨てないことに感動しました。
- 日本の学校の先生と生徒の関係が平等で調和がとれており、お互いに全幅の信頼を寄せているようで、これは私たちが見習うべき点です。
- 日本の基礎教育の最も基本的な特徴は「科学的、実践的」であると思われました。「科学」は国民性と学生の心身の発達を結びつけるものであり、一方、「実践」は各教育項目に最も具体的な形を現実に変えるものであると考えました。





第3章 タイとの 交流

Thailand





タイ政府日本教職員招へいプログラム

(タイ派遣プログラム)

背景

2015年度にタイ教職員を日本に招へいするプログラムが開始されて以来、毎年15名のタイ教職員が日本を訪問し、教職員や児童生徒との交流を深めてきました。そして、これらの実績が評価され、2017年に行われた日タイの教育大臣による会談においてタイ政府による日本教職員の受入れが提案されました。2018年に「第1回タイ政府日本教職員招へいプログラム」が実施され、5名の日本教職員がタイを訪問し、両国の念願であった双方向での交流事業が開始されました。2019年度には7名の日本教職員が派遣され、コロナ禍はオンライン交流が続けられました。

2023年度は対面交流が復活し、タイ教育省協力のもと4年ぶりに6名の日本教職員がタイを訪問しました。

目的

- (1) 日本とタイ教職員の交流促進のため、参加者がそれぞれの考えや教育実践を共有する機会を提供すること
- (2) タイの教育事情に関する知識を得てタイに対する理解を深めること
- (3) 学校間の連携のため、日タイ教職員間のネットワークを構築すること
- (4) 日本とタイ教職員同士のつながりを強化すること

活動内容

- (1) 学校等の教育施設の訪問
- (2) タイの教職員および児童生徒との教育現場での交流・意見交換
- (3) 教育・文化施設の視察
- (4) オンラインおよび対面の事前オリエンテーション、オンラインフォローアップミーティング

日程

日付	場所	活動
8月28日(月)	オンライン	オリエンテーション① ・広島大学 大学院人間社会科学研究科 准教授 牧 貴愛 氏による 「タイの教育事情」 ・ACCUによるオリエンテーション ・自己紹介
日本		
9月2日(土)	成田空港 近辺	オリエンテーション② ・ACCUによるオリエンテーション ・参加者のアクティビティ
日本		
9月3日(日)	バンコク	東京(成田)出発 バンコク到着 タイ教育省によるプログラムオリ エンテーション
タイ滞在 第1日目		
9月4日(月)	バンコク	テプシリン学校訪問 タイ教育省表敬訪問
タイ滞在 第2日目		
9月5日(火)	ナコーン ラーチャ シーマー県	ナコーン・ラーチャシーマー・ラ チャパット大学のデモンストレー ション学校訪問
タイ滞在 第3日目		
9月6日(水)	ナコーン ラーチャ シーマー県	コラート化石博物館・コラートジ オパーク(「ユネスコ世界ジオパー ク」)訪問 ソンノン学校訪問 鉄道局の家／タンマチャック・セ マラーム寺／ジオサイト、カオ チャンガム洞窟／ヤイティアン・ クエスタ視察
タイ滞在 第4日目		
9月7日(木)	サラブリー県	ゲンコイ学校訪問
タイ滞在 第5日目		
9月8日(金)	バンコク	タイ教育省にてプログラム評価会 王宮とワット・プラ・ケオ(エメラ ルド寺院)／ワット・アルン(暁の 寺)訪問 バンコク出発(夜)
タイ滞在 第6日目		
9月9日(土)	日本	日本(成田)着
機内泊		
10月28日 (土)	オンライン	フォローアップミーティング
日本		

参加者数

日本の初等中等教育に携わる教職員計6名
文部科学省、ACCUの職員各1名

参加資格

- (1) 日本国籍を有すること。
- (2) 過去に本プログラムに参加したことがないこと(2021年度、2022年度を除く)。
- (3) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。
- (4) 健康で、オンラインを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) プログラム期間中の意見交換や文化交流活動に積極的に参加できること。
- (6) プログラム期間中の学びを帰国後に児童生徒や学校、地域に伝える役割を担えること。
- (7) 将来にわたりタイと日本の教育交流の推進に寄与できること。
- (8) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的にプログラムに参加できること。
- (9) 習慣や文化の異なる国との交流であることを理解し、突然の変更などにも柔軟に対応できること。
- (10) EメールやLINEを用いて円滑に連絡ができ、またMicrosoft Word/Excelを用いて所定フォーマットに必要な情報を入力し提出できること。
- (11) 日常会話レベルの英語能力を有すること。
- (12) オンラインに必要なPCや通信環境を準備し、活用できること。

評価と報告

参加者は帰国後、ACCUに以下の報告書を提出した。

- (1) 第1回参加者報告書
※主にプログラム中の成果について報告
- (2) 第2回参加者報告書
※主に帰国後の取組やその成果について報告

通訳

プログラム期間中は、タイ語⇄日本語の通訳が提供された。

参加者リスト

	名前	所属先	教科
1	竹島 潤	岡山市立操南中学校	英語／総合学習
2	後藤 幸洋	北海道置戸高等学校	家庭科、福祉科
3	浅見 友記夫	大阪市立加美中学校	保健体育
4	中野 彩華	八千代市立大和田南小学校	体育・音楽・ 外国語科以外の すべての教科
5	根岸 彩夏	群馬県立大間々高等学校	英語

	名前	所属先	教科
6	川田 雅俊	守谷市立守谷小学校	外国語
7	生田目 裕美	文部科学省大臣官房国際課	—
8	伊藤 妙恵	公益財団法人ユネスコ・ アジア文化センター	—

実施内容

日本全国から応募があり、数十倍の倍率から選抜された日本教職員6名と、文部科学省およびユネスコ・アジア文化センターの職員2名がタイを訪問しました。

タイ派遣前にはオンラインでタイの教育事情を学ぶとともにチームビルディングを行いました。出発前までに参加者がそれぞれの役割を担い、SNSを利用しながらタイの学校で行う授業や文化交流の準備を進めていきました。

タイ滞在中にはさまざまな活動がありました。タイ教育省への表敬訪問に加え、国立の男子校、幼稚園・小学校が併設されている大学の付属学校、ユネスコジオパークと連携する内務省管轄で自治体立の学校、公立の中等学校と多様な学校訪問が含まれていました。特に、ナコーンラーチャシーマー県(コーラート)にあるユネスコジオパークへの訪問は、教育・文化を中心とする本プログラムを特徴づけるユニークな活動の一つでした。ジオパークには国際的にも価値のあるジオサイトの他、博物館や学校などの教育施設も含まれており、日本の福井県との関わりからも、この地の重要性が説明されました。また、さまざまな価値を有する土地を開発から守りつつ、将来的に発展させていくために、地域コミュニティで教育的な活動を行っていました。自然保護を学校との連携で進める教育的な学びの視点を含む内容でした。

学校訪問では、日本教職員がタイの生徒に授業する機会がありました。3つのグループに分かれ、「日本のスポーツを学ぶ(空手・柔道)」「SDGsについて語り合う」「日本の文化を体験する(折り紙・書道)」をテーマに行われました。日本の教員がそれぞれの強みを発揮し、タイの生徒に日本のことを伝えました。日本語コースで学ぶタイの生徒が含まれていたため、日本に対する関心や興味がさらに増したようでした。また、文化交流では、「恋するフォーチュンクッキー」に合わせて訪問団がダンスを披露し、最後は会場にいるタイの先生や生徒とともに踊りました。言葉だけでなく、音楽に乗せて身体を動かし、楽しく同じ時間を過ごすことで、タイと日本の参加者の物理的距離のみならず心の距離はさらに近くなりました。

本プログラムの参加者である日本教職員は、プログラムを通じて得たネットワークを活用し、日本帰国後にはタイとの交流を積極的に行い、教職員・生徒・学校間交流を実現させました。Sung Noen Schoolと岡山市立操南中学校・北海道置戸高等学校のトリプル交流、Kaeng Khoi Schoolと群馬県立大間々高等学校の交流、Debsirin Schoolと守谷市立守谷小学校の交流です。また、学校のみならず地域の資

源(ローカルラジオ、PTA 連合会、公開講座など)を利用し、地域コミュニティへの成果波及にも尽力しています。タイに対する理解とタイとの国際交流の種が芽吹き、根が広がっています。

参加者の声 (抜粋)

- タイへの関心や愛着、親近感が相当高まりました。旧知の友人に再会できたことや、日本・タイの友好交流に意欲・関心をお持ちの心ある方々と出会えたことで、こちらも気合をいただきました。交流相手の国について学ぶとき、事前－現地－事後と重ねていくことの効果や大切さをあらためて実感しているところです。
- 同僚性を高めることが心理的安全性を育み、温かい学校の雰囲気醸成につながることは日本と共通しているのではないだろうか。生徒が自立して学ぶ姿勢を作るための工夫や仕掛けは勉強になった。
- 実際に初めて、何もわからないまま、日本以外のアジアに行ったが、様々な文化に触れることができた。日本では当たり前だったことがタイでは違っていたりするなど、私にとって驚きと発見の連続であった。
- タイ派遣に参加したことで、私自身「国際交流の素晴らしさ」を肌で感じ、さらに、生徒たちに私自身の経験を伝え、海外に目を向けより幅広い視野で物事を考えてほしいと強く感じるようになった。また、授業や日常生活で生徒へこの経験を伝える中で、生徒がタイについて関心を持つようになってくれたり、将来を前向きに広い視野で考えてくれたり等、発信の効果が出てきており、手応えを感じている。
- タイの教育について質問をしようとするとき、自分が日本の教育システムのことについて知らないことがたくさんあるということに気づき、やはり外に出ると日本のことをより知るきっかけになるなと感じた。



สวัสดี

タイ教職員招へいプログラム

背景

2015年度から開始された本プログラムは、コロナ禍においてもオンライン交流を続け、第9回目となる今年度は、2023年10月2日(月)から10月8日(日)までの7日間にわたり、タイから初等中等教育に携わる教職員12名を本邦に招へいしました。また、オンラインで2023年9月25日および12月26日にミーティングを開催しました。日タイ教職員による相互交流がますます活発になっています。

目的

- (1)タイ教職員が日本の教育制度、教育事情について理解を深めること
- (2)タイ教職員が自らのコンフォートゾーンを飛び出し、「他者」と出会い、日本(異なる環境・文化・人)に触れること
- (3)タイと日本教職員が対話し、さまざまな価値観や考え方に触れ、相互理解や友好を促進すること
- (4)参加者がプログラムでの学びを、教育実践等につなげる
- (5)プログラムに関わるタイ日双方の参加者のネットワークを構築すること。

活動内容

- タイ教職員が日本の教育制度等の講義を受講する
- タイ教職員が日本の学校を訪問する
- タイ教職員が日本の生徒に授業し交流する
- タイ教職員が日本教職員と対話し、交流する

日程

日付/日程	交流形式・訪問先	活動
09月25日(月)	オンライン	・「日本の初等中等教育に関する概況」および「ESDの推進にかかる文部科学省の取組について」の講義受講 - 文部科学省 初等中等教育局 初等中等教育企画課 国際企画調整室 係員 柿澤聖奈 氏 - 文部科学省国際統括官付 ユネスコ 振興推進係主任 三島花 氏 ・ACCUによるオリエンテーション①
事前		
10月2日(月) 第1日	愛知県・岐阜県	・日本到着 ・ACCUによるオリエンテーション② ・歓迎夕食会
10月3日(火) 第2日	岐阜県 中津川市	・馬籠宿散策 ・中津川市立神坂中学校訪問
10月4日(水) 第3日	岐阜県 中津川市	中津川市立神坂中学校訪問
10月5日(木) 第4日	岐阜県 中津川市・多治見市	・地歌舞伎の芝居小屋「常盤座」訪問 ・多治見市立笠原小学校訪問
10月6日(金) 第5日	愛知県 江南市	愛知県尾北高等学校訪問
10月7日(土) 第6日	愛知県	日タイ教育交流会 (ペア・グループ交流)
10月8日(日) 第7日	愛知県	日本出発
12月26日(火) 事後	オンライン	フォローアップミーティング

参加者数

タイの初等中等教職員 12名
日本の初等中等教職員 12名(10月7日)

参加資格

- (1)日本の教育や文化に関心がある者
- (2)日本の先生や学校との交流に関心がある者
- (3)プログラム参加中ならびに参加後も主に教育分野にお

- ける日本との交流および日本とタイの相互理解を促進する活動に積極的に取り組む姿勢を持つ者
- (4) プログラムで得た成果を帰国後に自身の所属先、引いてはタイの教育に還元する姿勢を持つもの。
- (5) タイ王国の国籍を有すること。
- (6) 所属する学校等からの推薦を受けた、タイの初等中等教育に携わる教職員および教育行政職員であること。(教育行政官及び教育専門家を含む)
- (7) 健康でプログラムの全日程に参加が可能であること(オンラインも含む)。

評価と報告

- (1) 日本滞在プログラム後
各参加者はACCUの用意する評価票に記入をした。
- (2) 帰国後(フォローアップミーティングの後)
各参加者はプログラム中および帰国後に行った活動と成果に関する報告書を作成して提出した。

通訳

公式プログラム期間中は原則として日本語とタイ語間の逐次通訳が行われた。

参加者リスト

	氏名	所属先	役職/担当教科
1	Phutanaphat Phummai	Takpittayakhom School	Director
2	Amornrat Sripor	Maryvit Bowin School	Principal
3	Winulas Charoenchai	Sungnoen school	Director/ Math
4	Nur-ehsan Boto	Darussalam School	Vice principal /Biology
5	Taweetip Tantinimitkun	Kuiburiwittaya School	Science / Chemistry
6	Je-ana Bulah	Satriyala School	English
7	Anuwat Kaewma	Sakon Nakhon Phattana Sueksa School	English
8	Wipharat Putsadee	U-Thong School	English
9	Benjawan Wongsawat	Srinagarindra the Princess Mother School, Phuket	Japanese
10	Kasamaporn Jaiwong	Anuban Phrae School	English
11	Patsri Siriprapa	Ministry of Education	Director
12	Kanokwan Kwantinpu	Ministry of Education	Foreign Relations Officer

	氏名	所属先	役職/担当教科
1	岩田 智文	江南市立古知野南小学校	理科
2	朝日 仁美	糸魚川市立糸魚川小学校	学校司書
3	田中 尋子	兵庫県立三田祥雲館高等学校	英語
4	藤澤 陽子	愛知県立明和高等学校	英語
5	加知 昌彦	笠原小学校	校長
6	櫛田 真一郎	愛知県立愛知総合工科高等学校	物理
7	鈴木 洋介	静岡聖光学院中学校高等学校	英語・国際交流
8	久保田 涼香	中野立志館高等学校	地歴公民
9	木村 俊介	春日井市立丸田小学校	理科
10	伊藤 博美	茨城県立石岡特別支援学校	全教科
11	寺澤 祐子	江南市立古知野南小学校	外国語(英語)
12	仁木 淳浩	豊田市立美里中学校	社会

実施内容

海外の人と対面し、交流する意味をより強く捉え、昨年度からACCUで強く意識するようになった「出会い」を大切に、「学校での国際交流」「文化体験」「日本の先生とペア交流」を軸にしたプログラムでした。

「学校での国際交流」では、タイの先生は公立の小学校・中学校・高等学校を訪問しました。中津川市立神坂中学校では1日半訪問する機会があり、生徒による学校ツアー・学校地域紹介、郷土料理づくり、部活動見学、パラスポーツ車いす体験、タイ料理づくり、日本教員の授業公開、給食・掃除、タイ教職員による授業、日本とタイ教職員交流会と多種多様な活動をしました。生徒数38名の山間にある小規模な中学校で、先生方の丁寧な指導と見守りが行き届く環境で育つ生徒は、タイの先生に臆することなく言葉を交わしていました。

文部科学省に「教育課程特例校」として認定されている多治見市立笠原小学校では小学1年生から英語の学習が始まります。当日、タイの先生は6年生の英語の時間に参加しました。児童は英語で日本のことをタイの先生に説明しました。一人ひとりの良さを認めてもらえる学校で過ごす児童は、型にはまることなく、タイの先生とのコミュニケーションを全身で楽しみ、表現していました。エネルギーに満ち溢れた子どもにタイの先生は圧倒されていました。児童と教員の関係性、教育観において、日本の教育の重要な視点を見出せる好事例をご覧ください。

愛知県立尾北高等学校では、美術・家庭科・書道・英語・古典・体育・情報・地理・数学・音楽・物理の授業ツアーがありました。アフリカの楽器をつくる授業では、音楽の視点から国際理解を育む授業にタイの先生が注目していました。異文化理解のクラスでは「Why is the elephant important in Thailand?」のテーマでグループに分かれて英語でディベートしました。教職員と生徒との交流会では、タイの先生から

タイへの留学を希望する生徒さんがいるか質問がありました。4人の手が挙がり、将来的なタイとの交流に期待を感じさせるやりとりでした。

今回の日本滞在における「文化体験」の一つは、日本の古い街道にある「馬籠宿」を散策し、訪問する学校の地域を学ぶ活動です。中津川市立神坂中学校 教頭 中谷智之先生が案内役を務めてくださいました。もう一つは、地元で栽培されるそばの実をつかったそば打ち体験もしました。ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」を特徴づける料理のひとつである「そば」について知る機会になりました。

タイへの帰国前日には、名古屋でタイと日本の先生のペア交流をしました。街を散策しながら、タイと日本の先生同士が語り合いました。バスや電車を使って思い思いの場所を巡り、互いを知る時間でした。ペア交流では通訳がいなかったため、それぞれが翻訳アプリなどを駆使しながら、コミュニケーションすることになります。海外の方とつながる楽しさと、時折困難も感じたかもしれません。これをきっかけに、先生が世界への扉を開き、教育実践のあらたなる可能性を拓くことがねらいです。早速この時の「出会い」がその後の交流に発展している事例があり、1日ペア交流の可能性を見出すことができました。

参加者の声

(抜粋)

タイの先生

- 学校訪問をした学校の歓迎 体系的に活動されており、時間への正確さと生徒たちの規律、学校の衛生環境に感銘を受けております。また、生徒が自身の能力を発揮できる活動、日本の環境と雰囲気にも、日本料理にも感動しました。
- これから、タイの先生と生徒を日本に派遣し、学びの交換に参加してもらおうという考えが生まれた
- 最も感銘を受けた活動は、2023年10月7日の計6時間のバディの日本の先生との交流です。文化やライフスタイル、生活、移動、旅行、地理その他について意見交換をしました。大事だと思ったのは、学校や先生方の授業準備、教室の雰囲気、生徒の指導に関するお話です。最も気に入ったのは、科学博物館に連れて行ってくださったことです。科学館内で過ごした時間は、大変価値のある時間になりました。各地から採取された化石を眺め、クオリティの高いScience Show(サイエンスショウ)を観賞しました。
- 多種多様な活動に対応しているプログラムでした。アカデミック分野では小学校、中学校、高等学校と授業を拝見することができ、美術・文化分野では日本の美術や文化について触れることは日本への愛を生み、アイデンティティを育み、学校間でのつながりをつくりました。
- 各地の学校の先生方と交流したこと なぜなら学校訪問後に自身の中に疑問がうまれて、解消するために質問することができたから 日本の先生方は様々な役に立つ情報を与えてくださいました。

- 調理実習活動でタイの先生方と日本の生徒たちがおコミュニケーションを取ろうと熱心に試みており、短い時間でもお互いのことを知ることができました。

受入校の日本の先生

- タイの教師との会話を通して、英語を用いて国際交流をしようとする心情が芽生えた。また、海外とのパイプができた。可能ならば、交流する機会を作りたい。
- 英語を実際に見てもらった児童の中には「また来てほしい!」と話してくれた児童もあり、とてもいい機会になりました。最初は迎え入れる先生方も不安がっていましたが、実際に行ってみると、通訳さんがいたことや、訪問自体にはそれほど負担を感じなかったこともよかったと思います。児童にとっても、教職員にとっても素晴らしい経験になり、世界観が広がりました。
- 学校の特色である国際交流活動の活性化のきっかけになりそうです。

ペア交流に参加した日本の先生

- 教育の現場で、多様な価値観など多様性を受け入れるには、教員自身が多様な価値観に触れ、当たり前を受け入れている状態が必要だと思います。そのためには、違いを面白いと思えたり、不思議さを体感したりする機会があるとよいのかなと思います。
- 「人」を通して異なる文化や習慣を理解する大きなチャンスです。これは、知識だけではない感情のレベルでの「多様性の尊重」につながります。やはり、～には友人がいるから、～に知っている人がいる、というのは、国際的な協力が共感を築く上で重要だと思います。ですので、ファーストステップとして、実際に「人」と関わる国際交流を推進すべきだと思います。オンライン交流も便利ですが、オンラインではどうしても順番に話すことになってしまい、あっちでもこっちでもおしゃべりが起こっている場面を作りにくいですが、実はそのようなおしゃべり場面が友情形成には必要だと改めて感じました。
- 「教育に携わる」「未来を担う子供たちの育成」という共通点で国を越えて対話、交流ができたことは何よりだったと思います。また、自分自身の教育観や「何ができるのか?」という今後の展望にもつながりました。



第4章 インドとの 交流

India





インド教職員招へいプログラム

背景

日本とインドとの間の国際交流事業としては、2016年より「インド教職員招へいプログラム」が文部科学省、インド連邦政府教育省(MoE)、インド環境教育センター(CEE)の協力のもとで始まりました。第8回となる今年度は、2023年9月17日(日)から24日(日)までの8日間に渡り、インド共和国から初等中等教育教職員12名を本邦に招へいしました。

目的

本プログラムの目的は、プログラム中の活動を通じて、教職員が相手国に対する理解を深めると共にお互いに学び合い、相手国の教職員や生徒との相互理解と友好を促進し、教職員間のネットワークを構築・強化することです。また、プログラム終了後には、教職員が自身の学びを教育現場において児童・生徒・教職員・地域住民等に伝え、国際理解教育、平和教育、ESD(持続可能な開発のための教育)、GCED(地球市民教育)等を含めた「持続可能な社会に向けた教育」を推進する担い手となり、ひいては日印間の相互理解と友好の促進、そして平和で持続可能な世界の実現に繋がることを目指しています。

活動内容

- 学校等の訪問(授業見学、教職員・児童生徒との交流、国際理解教育・平和教育・ESDの視察等)
- 日本の教職員との意見交換
- 文化施設の視察
- 日本の教育制度や関連事項についての講義受講

日程

日付 / 日程	交流形式・訪問先	活動
9月13日(水) 事前	オンライン	出発前オリエンテーション 文部科学省による日本の教育制度についての講義
9月17日(日) 第1日	デリー	デリー出発
9月18日(月) 第2日	東京(羽田)、 栃木	日本到着 オリエンテーション 栃木へ移動
9月19日(火) 第3日	栃木	中学校訪問① 文化施設訪問
9月20日(水) 第4日	栃木、東京	中学校訪問② 文化施設訪問 東京へ移動

日付 / 日程	交流形式・訪問先	活動
9月21日(木) 第5日	東京	振り返りミーティング 自由時間・文化施設訪問
9月22日(金) 第6日	東京	中学校・高等学校訪問③
9月23日(土) 第7日	東京	日印教職員交流会、振り返り 閉会式
9月24日(日) 第8日	東京(羽田)、 デリー	日本出発 デリー着

参加者数

インド参加者：初等中等教職員12名(CEEの職員を含む)
日本参加者(9/23交流会参加者)：初等中等教職員12名

参加資格

【インド参加者】

- 国際理解教育、平和教育、ESD、GCED等の持続可能な社会に向けた教育に携わっている、または高い関心を持っており、帰国後はそれらの推進に寄与できる者。
- 所属する学校等からの推薦を受けた、インドの初等中等教育またはノンフォーマル教育センターの教職員(教育行政官及び教育専門家を含む)
- 英語での会話が可能であること。
- 健康でプログラムの全日程に参加が可能であること。
- インド共和国の国籍を有すること。

【日本参加者】

- インド教職員との交流に興味がある方
- プログラムに最初から最後まで参加でき、主体性を持って積極的に他者と意思疎通を図り交流を行うことができる方。

評価と報告

①事後評価

参加者はACCUの用意する評価票に記入した。

②帰国後の活動について

参加者はインド帰国後に行った活動と成果に関する報告書を提出した。

通訳

公式プログラム期間中は原則として日本語と英語間の逐次通訳が行わる。

参加者リスト

インドの先生

	氏名	所属先	専門 / 担当教科
1	Archana Panicker	Centre for Environment Education and Planet School	環境教育
2	Gayatri Dave	Centre for Environment Education	環境教育とESD (持続可能な開発のための教育)
3	Nandini Rathore	Block Resource Centre, Basic Education Department	英語、環境科学
4	Karabi Gogoi	Balya Bhawan High School	社会科学、英語、地理
5	Shipra Mishra	Tata Workers Union High School	理科
6	Chetan Rajendrakumar Pal	Kunjad Primary School	理科、数学、サンスクリット語
7	Shristi Sundi	Kasturba Gandhi Balika Awasiya Vidyalaya	英語
8	Vandana Chandansingh Thakur	Rachna School	環境問題についての学習、算数、理科
9	Monika Lamba Antil	Gyan Mandir Public School	理科
10	Sarupa Ram Mali	Government Higher Senior Secondary School	英語
11	Anita Yadav	Delhi Public School	英語
12	Gurpreet Kaur	Sri Dasmesh School	生物学

日本の先生

	氏名	所属先	担当教科
1	高橋 晋一	埼玉県立越谷北高等学校	英語
2	皿海 優子	神戸市立竜が台中学校	英語
3	岩見 理華	植草学園大学	英語
4	平澤 香織	横浜市立東高等学校	地理歴史公民科
5	石井 誠	南房総市立富浦中学校	英語
6	岡田 つぐみ	千葉県立東葛飾中学校	英語
7	藤村 啓真	神奈川県立有馬高等学校	英語、総合的な探究の時間
8	米山 知里	埼玉県立浦和第一女子高等学校	国語
9	富山 正美	茨城県立並木中等教育学校	英語
10	福田 勇人	本庄市立本庄東小学校	算数
11	石本 由布子	茨城県立並木中等教育学校	地理歴史・公民
12	藤野 明彦	東京都立東久留米総合高校	社会科 世界史

実施内容

今回のプログラムではインド各地から教職員・教育行政官12名が参加をしました。プログラムでは栃木県宇都宮市と東京都の中学校・高等学校への訪問を通じた日本の教職員や生徒との交流を主に実施をしました。

宇都宮市には9月18日～21日に滞在をして、宇都宮市立一条中学校と宇都宮市立陽南中学校に訪問をしました。一条中学校においては全校生徒が参加する歓迎セレモニーが実施され、日本の伝統文化の紹介としての校長先生による剣道の型の披露や生徒による吹奏楽の演奏などの温かい歓迎に参加者は大変感動していました。その後は授業見学を行いました。その中で授業の様子だけでなく、教室にある掲示物や備品など見慣れないものを見て様々な質問が出ました。他にも地域の寺社仏閣などの文化施設への生徒によるガイドツアーも行われて地域文化に対する理解も深めることが出来ました。

翌日訪問した陽南中学校においては主に生徒との交流を深める機会を多く設定しました。例えば生徒へのインドのヨガ・インド数学の授業やインドの学校や地域の文化の紹介がインドの参加者によって行われたり、音楽・化学・体育・書道などの授業に生徒と一緒に参加をしました。参加した生徒はインドのヨガや数学、地域や学校の様子など様々な新しい情報に触れてインドの参加者との交流を楽しんでいる様子が見られました。他には日本の教職員との交流会を行い、2日間の学校訪問を経て生まれた日本の教育への疑問を聞いたりするなど両国の教育事情について活発な意見交換が行われました。

東京での活動においては都立白鷗高等学校・附属中学校に訪問を行いました。学校では授業参観・インド教職員による授業・両国の教職員同士の交流会など様々な活動を行いました。普段から学校が行っている茶道・華道・書道などの日本の文化に関しての授業を見学した参加者は実際に文化体験を行い、伝統的な文化を授業の中で伝えていくための学びの機会を提供していることに大きな関心を寄せていました。

上記学校への訪問に加えて、個別に応募を頂いた日本の教職員の方が参加する日印教育交流会を実施しました。交流会では「多様な人々との対話をすることの意義」をテーマにしてグループでの少人数でのディスカッションを行いました。ディスカッションでは今後より多様性・不確実性が増すことが予測される社会において教育における多様な他者との対話の意義について意見交換を行い、教育者として参加者それぞれが今後どのように行動していきたいかを話し合いました。

プログラム全体を通じて参加者は五感を使って、オンラインでの交流では得ることができない様々な情報を得て刺激を得ている様子でした。また現地での交流を経て繋がった日本の参加者とのネットワークを用いて帰国後も早速オ

ンラインでの継続した交流を進めています。今回のプログラムでの経験が今後どのように参加者の教育実践に還元されていくかが楽しみです。

参加者の声

- プログラムを通じて日本の教育と文化に関する私の見識を広げてくれました。またプログラムで会った様々な人たちの経験を知ることができたのがとても印象的でした。(インド側参加者)
- 日本の生徒や先生方との交流の中で、私はたくさんの新しいアイデアを学びました。日本から帰国後、早速私は学んだ様々な取組を学校で実践し、良い変化を得ることができました。(インド側参加者)
- 参加前と参加後でインドに対しての印象が変わった点として、インドの先生方と私たち日本の教員がもつ共通する視点や目指したいポイントなどが一致することが挙げられます。「自己肯定感や自己効力感」についての話をしたときに、インドの先生方も児童・生徒自身が「自己肯定感」を身に付けられるような取り組みをしていることを伺いました。日本も教育現場でも取り入れていきたいと思う実践も伺いました。(日本側参加者)



事業 総括

Summary

今年度の事業を振り返って

新時代の教職員国際交流の在り方



ACCUの教職員の国際交流事業は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて過去3年間は主にオンライン形式で実施してきましたが、今年度に入り対面形式での交流が本格的に再開しています。今年度の教職員国際交流事業を企画・運営する中で、対面形式だからこそその参加者の学びの在り方に、改めて気づきました。それは「参加者の学びのきっかけ(フック)が非常に多岐に渡る」ということです。

オンライン形式では参加者の視点は画面に集中しており、得られる情報が限られています。一方、対面形式では、参加者は自らが存在する空間において、はるかに多様な情報を得ることが出来ます。例えば、インドの教職員が日本の中学校を訪問し授業を見学していた際に、たまたま教室に掲示されていた生徒の学級における班の当番表を見つけ、大変興味を持ち、それが日本の学級運営について学ぶきっかけとなりました。当番表の内容自体は見学していた授業とは無関係でしたが、参加者がその場にある多様な学びのフックの1つである当番表が運営側も特別意図していなかった学びにつながったのです。

対面形式の中に様々な学びのフックが存在するという事は、ある意味で、対面プログラムでは参加者自身のアンテナの広さやモチベーションがプログラム期間における各自の学びの充実度に結びつくと言えるかもしれません。また、対面形式ではコミュニケーションの在り方も変わってきます。各日程の移動中や活動終了後に得られる情報が多く、コーヒープレイクなどのちょっとした休憩時間に参加者・関係者間で交流し、心の距離を縮めるきっかけが生まれるという面も対面形式ならではの特徴や良さです。

こうした「対面形式だからこそ良さ」がある一方で、ACCUでは新型コロナウイルスのパンデミックにおけるオンライン交流の運営経験を活かし、両者を組み合わせた交流を試みています。一例として、今年度のプログラムでは対面形式の交流の事前・事後にオンライン形式でのセッションを追加しました。その結果、プログラム開始前から参加者の目的意識が向上し、参加者同士の関係性の構築や、プログラム終了後の振り返りのワークショップを通じて得た学びをその後の参加者の変容に、よりスムーズにつなげられるなどの効果がありました。また、オンライン交流のためのツールが発達したことで、プログラム終了後も対面での交流を継続できる環境が整備されたと同時に、対面交流でのみ実現可能なことに気づくこともできました。

今後もACCUでは、時代の変化に柔軟に対応しながら、より充実した国際交流の在り方を模索していきます。

写真で振り返る、令和5年度初等中等教職員国際交流事業 *Memories of international exchange*



(敬称略)

令和5年度プログラム協力機関・協力者

● 韓国教職員招へいプログラム

宮城県加美農業高等学校 校長 根岸 一成
登米市立加賀野小学校 校長 二階堂 浩一郎
福島県小野町教育委員会 教育長 有賀 仁一
小野町立小野中学校 校長 富岡 泰成
小野町立小野小学校 校長 小荒井 新佐
国立大学法人宮城教育大学 教育学部 国際教育領域
教授 市瀬 智紀
日本雁を保護する会 会長 呉地 正行
みやぎ北ユネスコ協会 会長 若見 朝子
一般社団法人ふらむ名取 代表理事 格井 直光

● 中国教職員招へいプログラム

苫小牧市教育委員会 教育長 福原 功
苫小牧市立美園小学校 校長 中島 勉
苫小牧市立清水小学校 校長 井村 友美
苫小牧市立開成中学校 校長 細部 善友
株式会社ファーストリテイリング サステナビリティ部
ビジネス・社会課題解決連動チーム リーダー 伊藤 貴子

● タイ教職員招へいプログラム

中津川市立神坂中学校 校長 吉田 知己
多治見市立笠原小学校 校長 加知 昌彦
愛知県立尾北高等学校 校長 南谷 守
愛知県立尾北高等学校 教頭 後藤 光毅

● インド教職員招へいプログラム

宇都宮市立一条中学校 校長 増山 孝之
宇都宮市立陽南中学校 校長 手塚 弘幸
都立白鷗高校・附属中学校 池戸 成記

● 韓国政府日本教職員招へいプログラム
(ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラム)

文部科学省 総合教育政策局 調査企画課
外国調査係 田中 光晴

● タイ政府日本教職員招へいプログラム
(タイ派遣プログラム)

広島大学 大学院人間社会科学研究科
准教授 牧 貴愛

プログラム関連機関

● 文部科学省

文部科学省 大臣官房国際課長 北山 浩士
文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室長 水野 俊晃
文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室
人物交流専門官 加茂下 祐子
文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室
人物交流係員 野内 瑛里
文部科学省 大臣官房国際課 国際協力企画室
人物交流係員 小川 このみ

● 海外パートナー機関

- ・韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU)
- ・中国教育部
- ・中国教育国際交流協会
- ・タイ教育省
- ・インド教育省
- ・国際NGOインド環境教育センター (CEE)

● 海外協力機関

- ・駐日本国大韓民国大使館
- ・タイ王国大使館学生部
- ・中華人民共和国駐日本国大使館 教育処
- ・在日インド大使館

事業実施運営機関

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32-7F
Tel: 03-5577-2853 Fax: 03-5577-2854
Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL: https://www.accu.or.jp

理事長
田村 哲夫
国際教育交流部長
栗林 正
国際教育交流部主任
伊藤 妙恵
国際教育交流部プログラム・スペシャリスト
杉戸 卓磨
国際教育交流部プログラムオフィサー
蓮見 詩保子

文部科学省委託 令和5年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業実施報告書

2024年3月
編集・発行
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル
電話 03-5577-2853
Email accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL https://www.accu.or.jp/
デザイン・印刷・製本
日経印刷株式会社

©2024 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

